

「福島で『心の傷』と向き合って」

2021年03月19日

『週刊金曜日』の3月12日号に、精神科医の蟻塚亮二氏が、「福島で『心の傷』と向き合って」と題して、寄稿している。興味深い論考なので、紹介し、私の感想も書きたい。

2月13日、福島や宮城で震度6強の地震が襲った。口達者で威勢のいい80代の女性が「今月いっぱい生きられるかなあ」と「ぬけ殻」のようになった。また、70代の男性は、今回の地震以来、発汗多量で眠れず「不安で、不安で立ってもおられない」という。10年前の恐怖体験が生々しいだけに、当時の精神状態に連れ戻された訳である。蟻塚氏自身も、心身不調で、軽い腸閉塞を起こし、吐き気が続いた。また、耳鳴りが大音響となり、気力が低下し、急な動悸に襲われ、不安感に苦しんだと、ご自分の弱さを吐露している。

蟻塚氏は、青森県弘前市で、統合失調症の人たちの治療に当たっていたが、うつ病になり、仕事ができなくなった。私の小さな経験でも、うつ病になって、仕事ができなくなった精神科医を二人知っている。蟻塚氏は患者と誠実に向き合い、うつ病に陥ったのではないかと想像する。知人から「沖縄に来て、精神科地域ケアの仕事をしてくれないか」と誘われ、2004年に沖縄に移住した。那覇の病院で、夜に何度も覚醒する「奇妙な不眠」の高齢者を診る経験をした。聞いてみると、「親とともに死体を踏み越えて逃げた」「妹が米軍の機銃掃射で撃たれ、はらわたをだしてウンウンうなりながら24時間後に死んだ」「その時のことが、まるで切り取ったみたいに頭に浮かんでくる」と話した。沖縄戦後60年あまりを経て発症したPTSD（心的外傷後ストレス障害）であることが分かった。うつ病などの診断名で通院している高齢者について、洗い直しの診断を行った結果、10ヶ月で100人近い人が沖縄戦のPTSDの症状であることが分かった。

蟻塚氏は2013年に、福島県相馬市の診療所に赴任した。津波で母親が流され、父親と仮設住宅で暮らしている30代の女性が、母方の叔母が亡くなったのを契機に眠れなくなり、泣き出し、津波の場面がフラッシュバックしてくる、そんな症状を訴えて診療所にやってきた。沖縄では、晩年発症型のPTSDであったが、彼女の場合は2年後に発症したPTSDである。被災時の危機的状況がフラッシュバックして、不眠、うつ病的な症状を現す患者が多く見られた。原発事故によって故郷を喪失し、慣れない土地で生きるストレスを与えた東京電力の責任は限りなく大きい。何より、親しい人を失った「対象喪失」は大きな苦しみである。精神分析の創始者フロイトは、対象喪失の痛みを受容して、再び立ち直るには「悲哀の仕事」という過程を経ることが不可欠だと言っている。家族が交通事故で急逝した場合、遺体安置所で対面し、泣き崩れる。悲しみは時に怒りともなる。人は「ショック、否認、悲しみ、怒り」などの感情反応を行ったり来たりして、ようやく対象喪失の悲しみを受け入れることができる。この過程が重要である。

蟻塚氏は、「福島の人たちは、津波や原発事故で失ったことの悲しみを十分に悲しめているだろうか」と問うている。新聞やテレビは、「がんばろう!福島」「復興」「絆」など、明るく勇ましい「躁的」なスローガンを並び立てる。震災で負ったPTSDをしみじみ語り、悲しんでいる人々の心を癒そうとする記事はほとんどない。「泣くことや悲しむことは女々しいことだ」とでも言うのか。日本の文化は泣き、悲しむ感情表現を抑制する文化である。沖縄のように60年後に起きるPTSD発症を防ぐためには、今、感情を吐露し、それを共有する場面が必要である。もっと怒り、悲しみ、憎しむことが足りないと言う。自分の弱さをさらけ出した蟻塚氏らしい論考で、深く賛同する。